

終刊にあたって

古川 彰

2008年秋に「組織的な大学院教育改革推進プログラム（大学院 GP）」の採用が決まり活動を開始してから2年余りは、私たちにとっても大学院生にとってもそれまでにない充実した日々だった。大学院生が組織する「東アジアのストリートの現在」「〈承認〉の社会学的再構築」などの研究会、同じく院生主体の中国・北京師範大、ネパール・トリブバン大学とのジョイント・ワークショップ、講義プログラム・先端社会研究、国際学会での報告のためのレッスン、調査研究や学会報告助成などのさまざまなプログラムが同時に動きだし、院生も事務局もそして私たちも、試行錯誤の連続ながらもその動きを楽しんでいたように思う。

この大学院 GP では研究会、ワークショップ、助成などを個々別々の事業としてではなくプログラム全体が相互に関連を持つように企画され進められてきた。たとえばこの書評誌は、図書助成や研究会、国際ワークショップの成果報告と位置づけるように計画されたものであった。それは、私たちの大学院 GP の目的を「ソシオリテラシーの涵養」としたことに由来する。前リーダーの高坂が「発刊に寄せて」に記したように「最近の大学院生は早い段階で方法的に過剰に専門化してしまう（それに比例して、他の方法には極端に無知になってしかも省みない）傾向がある」ため「社会学専攻の大学院生には方法論的に早い段階で偏り過ぎないでもらいたい」、そして全体を連関させる力、素材を総合する力を培ってもらいたい、それがソシオリテラシー涵養の要である。同時に、ソシオリテラシーの涵養には、プログラムを自分自身で動かす力やフォローする力を養うことも必要であると考えたからだ。

この書評誌はそれらのプログラムのなかでも重要な位置を占めていた。サブリーダーの阿部と助教の白石が中心になって作った企画案には、図書助成を「金銭支援に終わることのないように、「支援」に対する「責務」として書評論文の提出」を義務づけ、院生自身がその「編集にも責任をもつ」こと、そして「書評を提出した院生たちの関心領域を、より広範な学問研究動向との関連で mapping するよう」な編集体制をとることが記されている。これらの意図が十分に達成されたかどうかは、今後、この書評誌の経験をどのように活かしていくかに関わっているが、すくなくとも院生が書評誌の編集に関心を寄せ、さまざまなプログラムの経験をもって寄与しようとしてきたと言う意味で書評誌はその役割を果たしたといえるだろう。

書評誌刊行をはじめとしてこの大学院 GP で実施されたプログラムでの院生の経験は、私たち研究科にとっても、院生にとっても小さな芽にすぎない、それをさらに支え育てていくことが、「大学院の教育基本改革プログラム」がプログラムであることの意味であり、どのような形で継続プログラムを実施するかが大学、研究科に課された重要な課題である。

(ふるかわ・あきら 大学院 GP プログラム・リーダー)